

生活目標反省の一視角 — 潜在能力アプローチによる示唆 —

乗 本 秀 樹

An Angle for the Reflection on Objectives of Daily Lives — Implications by Capability Approach —

Hideki NORIMOTO

Summary

The issues made clear in this paper are as follows.

First, each person's objectives of daily lives can be recognized reflectively.

Second, the essential points of capability approach are extracted from some aspects.

Third, the factors which are important in recognizing objectives of daily lives and the matters which demand attentions in following capability approach are the same contents. So, by examining capability approach more precisely, each person will be able to recognize his or her own objectives sufficiently.

キーワード：生活目標、潜在能力、生活経営、A.セン

1. 生活目標の考察法

私たちは、抱負や夢、あるいは解決課題として生活目標を強く感じることもある。また、物の調達、ライフイベントの実現、所得の獲得などとして、戦略化された生活経営目標が意識されることもある。だが、生活目標は、そのようなときにだけ展開するのではない。むしろ、1人ひとりにおいて、ある程度に安定したゆるやかな構造を保ちながら日常的に展開しているのではないだろうか。そして、生活の状況や環境が展開するなかで、生活目標の内容が更新されたり目標実現への自律性が変容するのではないだろうか。生活経営にとって重要な主体的契機である生活目標のそのような様相について具体的に見当をつけること、ならびに生活目標を自覚的にとらえることを励ましてくれる見解に触れることが、本稿の課題である。

課題への接近に先立って、生活経営学のなかに生活目標研究の方法を位置づけておこう。

生活を対象とする考察は、考察する主体がどこにいるか、考察の動機が何であるか、という2つの軸によって特徴づけられる。前者については、考察する主体が生活の内にいる場合と外にいる場合がある。後者については、すぐに役立つことをめざして「こうあるべきだ」と規範的に臨む場合と、事実把握のための観察や解釈に重点を置いて臨む場合とがある。両軸を交叉させるとき、4通りの考察パターンが見出される¹⁾。このことは、生活目標の考察についても言える(図1)。

すなわち、生活の内において具体的な状況下でどのような目標をどのように設定しようかと考える場合(A)、生活の内において自己診断的に目標の質を点検する場合(B)、生活の外において生活主体が保つべき目標について理解を深める場合(C)、ならびに生活の外において現実の生活主体を支え導く

目標を把握したり展望する場合 (D) である。

いうまでもなく、生活経営学の研究は生活事象を客観化・対象化する。そのために、生活の外に立つことが多い。窮地から脱け出したり改善を図ろうとする生活主体に目標の持ち方を指し示す場合 (C)、あるいは生活主体に寄り添いながら目標の持ち方をともに見出そうとする場合 (D) が、そうである。

しかし、この2つの例から推察されるように、生活経営学の目標研究は、むしろ A~D の間でそれぞれの考察成果を交流させることに特長がある。生活場の1人ひとりに生成する生活目標に「労働力の再生産」や「自己実現」などの規範が取り入れられる過程 (C→A)、生活目標が戦略的に吟味されて生活経営目標として設定される過程 (B→A) を見守ったり励ますことも、そうである。そして、生活目標を自覚的にとらえることの切実さを訴える経済理論 (D) に触れることによって、生活する人びとの内発的な生活目標吟味 (B) の可能性を模索しようとする本稿も、その1つである (D→B)。

		臨 み 方	
		実用・実践	事実の把握
位 置	生活の内	A ↑	B ↑
	生活の外	C ↓	D ↓

※矢線は、生活目標の考察成果の交流を表す。

図1 生活目標考察のパターン

2. 自覚される生活目標

(1) 生活目標の構造²⁾

生活の内にいる私たちは、自身の生活目標を反省的にとらえることができるのだろうか。この問いに答えるために、たとえば目の前にいる人に尋ねてみよう。

まず、「何をしているのですか。」と尋ねてみよう。すると、「バラを植えています。」とか「ラジオの英語講座を聴いているんだよ。」と答えてくれる。具体的な行為である答えの内容には、動作や作業とともに目標も含まれている。あるいは、答えの内容自体が目標でもある。それを、「下位の生活目標」と呼ぶことにしよう。

次に、「何のためにバラを植えるのですか。」「何のために英語講座を聴いているのですか。」と尋ねる。すると、「この花のよさを味わおうとしているのです。」「コミュニケーション力を増そうとしているんだよ。」という答えが得られる。これらの答えには、具体的な行為の背後にある意図やモチーフが表現されている。これらを、「中位の生活目標」と呼ぶことにしよう。

さらに、「なぜ、この花のよさを味わおうとしているのですか。」「なぜ、コミュニケーション力を増そうとしているのですか。」と尋ねてみよう。すると、「ライフワークを実践するためです。」「職業能力を維持し向上させるためだよ。」といった答えが戻ってくるかもしれない。生活運営の基調を表すこれらの目標を、「上位の生活目標」と呼ぶことにしよう。

さらに重ねて、「なぜ、ライフワークを大切にしているのですか。」「なぜ、職業能力を維持し向上させるのですか。」と問おう。すると、「いきがいだから。」とか「しあわせに過ごしたいから。」などの答えが戻ってくるのではないか。平凡で紋切り型の表現ではあるが、言い当てることができそうな言葉が思い巡らされたあげくに選ばれたものであろう。“そう言うほかない”これらの言葉は、いわば理念としての生活目標であり、「生活目的」である。

目の前の相手に、今度は、「バラをどのように植えるのですか。」「ラジオの英語講座をどのように聴くのですか。」と尋ねてみよう。すると、「5月末までに、30 m²の花壇に3品種を植えるのです。」「毎

夜 15 分間聴いて、そのあと 15 分間復習するんだよ。」という答えが戻ってくるかもしれない。それらには数値による表現も取り入れられており、「生活基準」と呼ぶのがふさわしい。

以上のような問答から察するに、私たち（ここでは、目の前にいる人）の日常生活は生活目的、生活目標、生活基準という広義の生活目標によって支えられ運ばれる。そして、生活目的と生活基準の間にある狭義の生活目標（以下では、「生活目標」と言う）のうち、相対的に下位の生活目標は、相対的に上位の生活目標によって意味づけられる。また、生活基準によって、下位の生活目標の達成目安が示される³⁾。

生 活 目 的……漠然としているが多くの人びとが了解し合える。

上位の生活目標……生活運営の基調として表される。

中位の生活目標……個別的・具体的な生活行為群を貫く意図やモチーフとして表される。

下位の生活目標……個別的・具体的な生活行為として表される。

生 活 基 準……生活行為の達成目安（しばしば定量的）として表される。

上では、個別的で具体的な生活行為の目標が遡及的に統合されて、より大綱的な生活目標や生活目的に結びついてゆくことが示された。これとは逆向きに、大綱的・総論的な生活目標がより細目的・各論的な生活目標へと枝状に分岐してゆく姿も想像できる。生活基準も含めて統合と分岐の様子を例示すると、図 2 のようである⁴⁾。

(2) 生活目標の動態と能動性

図 2 の生活諸目標は、生活環境の移り変わりや私たちの成長とともに更新される。前者の要因について言うと、学校で生活で仕事で、仲間との活動で、あるいはテレビや新聞やインターネットから得られる情報を通して、図の諸部分や大きさ（細目数を表す横幅）が変わってゆく。たとえば、学校での防災学習が普及するにつれて、「学校で学ぶ対策を家族でも学ぶ」（下位の生活目標）ことになるであろう。そのことによって、生活諸目標の関連部分がより精細で豊かになる。

なかでも、私たちが遭遇する危機や好機は、生活目標の部分や全体に影響を及ぼす。危機や好機には、それまでの生活目標が受け継がれつつも、各位の生活目標がより精細に分節され補充されたり、生活基準が変更される。あるいは、生活目標の一部が改廃されることもある。

こうして、生活目標の内容と構成が変わってゆく。その過程を詳細に解析することもできる。

大河内暁男氏は、何らかの知覚や情報を得た企業者がそれをきっかけにして生み出す経営構想に着目する。そして、企業者の「経営構想力」性能を把握するために、「時間的射程の長短」「空間的射程の長短」「射幅の広狭」「選択精度の高低」という 4 つの視点を用意する⁵⁾。これらは企業経営において経営構想が評価されるための「大まかに程度を表わす量的」な指標であるが、若干の補正によって、“生活経営構想”と呼べる生活目標に対しても適用できるのではないか⁶⁾。

時間的射程の長短……どれくらい遠くまで未来を見通しているか、どれくらい古くまでの過去の経験を生かそうとしているか。

空間的・関係的広がり広狭……どれくらいの空間的・社会関係的な広がりに対応を考えようとしているか。たとえば、防災への対応は、自身だけのこととして構想される場合もあれば、家族や近隣と連携した行動が構想される場合もある。あるいは、町内会や自治体の施策に自身や自家の方策が組み合わせられる場合もある。

射幅の広狭……ある知覚や情報を得たとき、これに対して「どれほどの広さの問題領域から」対応への示唆が引き出されてくるか⁷⁾。たとえば、夏期に節電の必要を感じたときの対応には、無駄な点灯をチェックする、住まいへの緑の取り入れ方や衣服の着方を見直す、勉強や仕事の時間帯を見直す、発電源のあり方に関心を向ける等のちがいがあ

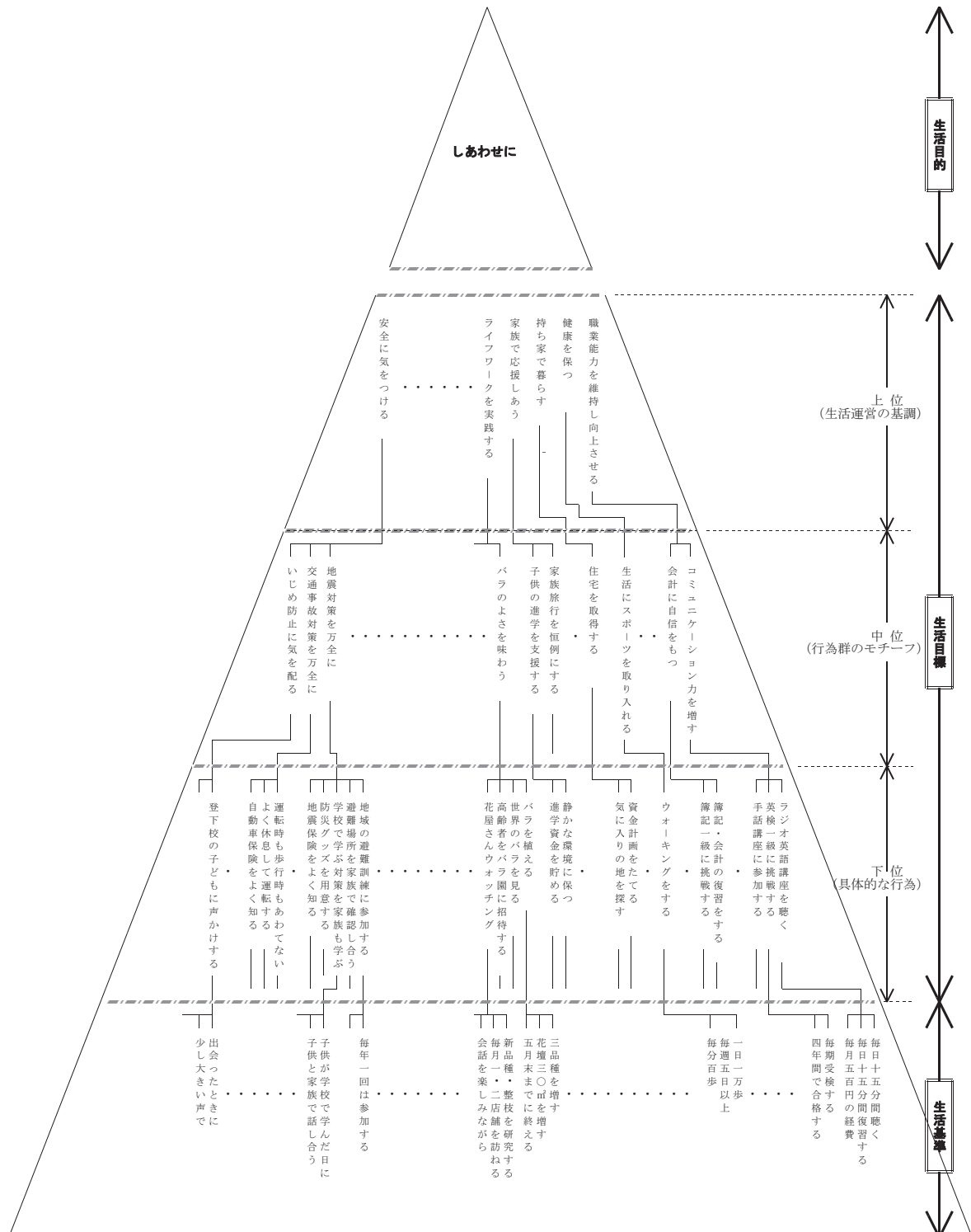


図2 生活目標の構造

選択精度の高低……多くの可能性のなかから、自分の生活目標にとって「本質的なものを選び抜くこと」ができているか⁸⁾。たとえば、「職業能力を維持し向上させる」（上位の生活目標）ために「コミュニケーション力を増す」（中位の生活目標）うえで、「ラジオ英語講座を聴く」「英検一級に挑戦する」（下位の生活目標）ことが十分に適切か。ポルトガル語や手話などのコミュニケーション知識・技術を習得することが効果的な場合もあるのではないか。

これらの視点に助けられて、生活目標の充実やバランスの度合いを推し測ることができる。

(3) 生活目標展開の制約

生活の展開のなかで目標が設けられておりそれを敏感かつ自覚的にとらえる様子をみたが、生活目標があいまいになることもある。

生活目標の無意識化は、その1つである。(1)では、問い答えることによって生活目標の連鎖が見出された。その意味で、生活目的と生活基準を含む生活諸目標(図2)は、少なくとも「問われれば答えられる」状態にある。だが、すべての生活目標や生活基準がいつも明晰に意識されているわけではない。たとえば、当初には目新しく感じなかったことがらが、やがて習慣やルーチンになることがある。習慣やルーチンにおいては、マネジメント・サイクル(計画・実行・統制・評価・調整)の実行過程だけが作動する。そこでは、生活目標や生活基準として目指されていたことがらが、意識されなくなりがちである⁹⁾。

こうした意味での生活目標のあいまい化とは別に、便利で快適な生活を目指し実現する現代の生活が構造的に陥りがちな隘路がある。それは、いわゆる生活の社会化のなかでの生活目標のあいまい化である¹⁰⁾。

すなわち、個々の生活場やその近傍で行われていた生活行為の大部分が、家事等の労力・時間の節約、費用の節約、良質の成果と高い満足の獲得などの動機に導かれて、企業・互助組織・公的機関に委ねられる。多くの生活行為を他に委ねることによって、生活する人びとには時間やゆとりがもたらされる。それらを活用するために、新しい生活目標を構想することもできよう。

しかし、そこには、「財の流れに応じた諸主体のかかわり合い」(生鮮食品の卸売市場流通など)、「信用をめぐる諸主体のかかわり合い」(家電製品等の販売信用など)、「両者の性質が複合する諸主体のかかわり合い」(住宅の購入など)などの複雑な結びつきが形成される。そのなかで、生活目標に照らしつつ熟考して選択したり、達成に向かって積極的に関与する傾向が薄らいでゆくこともある。

○物流の川上と川下の間に多くの主体が介在するとき、生活する人びとの声が生産の現場に届きにくいし、生産する人びとの関心も消費の場からはわかりにくい。同様のことは、多くの企業が連携するなかにも生じる。生活する人びとの声が届いても、ただちに生産活動に反映されるとはかぎらないのである。

○生活主体と他の主体とのあいだに長期固定的な関係が形成されるとき、臨機応変な生活改善行動がとりにくい。たとえば、ローン契約を金利等の条件の変化に応じてただちに変更することは困難であるし、返済額が家計費の固定的割合を占めるとき他の支出への振り向けが制約される。

○マネジメント・サイクルが損なわれることがある。たとえば、財・サービスを購入する当事者の参画意識が薄いままに、契約等の手続きが金融機関や販売店の主導で進められると、事実上、計画が放棄される。そのような場合、後日に思いがけない事態が生じたときに、対応が困難になりかねない。

これらは財やサービスの売買をめぐる生じることがらであるが、互助組織において連携したり協同する場合にも類似の状況がうかがわれる。

互助組織には、「具体的テーマをめぐる任意参加の協同」「NPO 制度に支えられる任意参加の協同」「伝統や地縁に支えられる全員参加の協同」「行政の下部機構の性格をもつ全員参加の協同（町内会など）」「協同組合制度に支えられる協同」などがある。これらは、参加人数が増えるにつれて、活動メニューが多彩になりそれぞれの活動の質が向上する（スケール・メリット）。入れ違いに、1人ひとりの発言力や民主的管理の実質が薄まる¹¹⁾。それとともに、熟考や対話や選択を重ねて生活目標を達成する見通しが薄らいだり、参画する充実感が失われてゆく。たとえば、学区内の上級生・下級生の親睦を深めようとして始まったソフトボール活動が、参加児童数が増えるにつれて打率などによって数値管理されるようになることがある。そこでは、当初の活動趣旨であった直接的なふれあいと充実感の感得が忘れられがちである。成功的であればあるほどに硬化しがちな協同の活動を、どのようにほぐすか。このことが、協同展開の重要な鍵となる¹²⁾。

さらに言うと、生活の社会化のなかで、従来あった生活展開の基礎的な知識や技術が忘れられる。あるいは、何についても速さ（早さ）が求められたり個人主義的な消費活動が志向される。それとともに、自前の技術や創意を発揮しようとする意欲が減ったり、ゆっくりと時間をかけて感受性や人間関係を築こうとする姿勢が薄らぐ。そのようななかで、生活目標の内容にも偏りが生じる。

3. 潜在能力アプローチのあらまし

(1) 潜在能力の概念

A. セン氏は、比較的初期の論文において、農家家族や農業労働力、農業生産の技術、農産物・農業生産要素の市場などの諸変数に着目し、農家・農業労働力の収益や満足を目安にして、農業経営形態・農業構造の変容と資源配分の効率を分析した¹³⁾。やがて、彼は、インドの厳しい貧困の実情を正視するなかで、「潜在能力（capability）」という概念を提示する¹⁴⁾。

経済分析では一般に経済主体の「優位（advantage）」を表す情報に注目するが、多くの場合に、それは「幸福や快樂（あるいは効用を表すもの）」または「所得、富、資源」であった¹⁵⁾。セン氏は、経済学が現実把握力と現実改善の実践力を増すためには、これらに注目するだけでは不十分であり、「潜在能力」をこそ重視すべきだと言う。すなわち、効用にもとづくアプローチ法や資源にもとづくアプローチ法にくわえて、潜在能力にもとづくアプローチ法（以下では、「潜在能力アプローチ」と呼ぶ）という視点を提唱するのである¹⁶⁾。

潜在能力アプローチは、2つの側面から説明できる。その1つは、財が生活の中で効果を発揮して「福祉」を高めてゆく段階を追った説明であり、これによって潜在能力の概念が明晰になる¹⁷⁾。

第一の段階；個人は、さまざまな財（たとえば、米、自転車、本、洋服）を所有し、その範囲内で選択し利用する（{米、自転車、本、洋服、米+自転車、米+本、…、米+自転車+本+洋服}という選択可能集合）。ただし、いずれの財も、食料、輸送・移動、学習、衣装という特性に結びついてこそ意義をもつ。

第二の段階；自然的・社会的な環境や健康の状態などによって、財の利用が制限されたり工夫がなされる。たとえば、当該の個人が高齢であるために必ずしも多くの米を必要としない、坂道が多くて自転車に乗りにくい、視力が低下して本があまり読めない、行事や社交が少ないので洋服を着る機会があまりないといった事情に制約されながら、米・自転車・本・洋服を取り入れた生活を組み立てる。

第三の段階；「財に対する支配権」（第一の段階）と「財の特性を機能に変換する個人的特徴」（第二の段階）のもとで、「機能（function）」が達成される¹⁸⁾。「栄養は行き届いているか・

服装はきちんとしているか・移動能力は備わっているか・コミュニティの生活に役割を果たしているか」といった「ありさま」が実現されるのである¹⁹⁾。「ありさま」候補群の多様さは、当該個人が機能の選択に対してもつ自由度の大小を表す。

第四の段階；達成された機能について「幸福」感が享受される。ならびに、達成された機能について、「生き方」としての「福祉」評価もなされる²⁰⁾。

第三の段階における実現可能な「ありさま」とその多様さが、個人の「潜在能力」を表す。生活には多くの異なった側面があり、私たちが大切だと思う財の機能はずいぶん多様であるが、潜在能力はそうした諸機能をさまざまに結合して達成しようとする力である。そこでは、財の獲得や効用（幸福）の達成にとどまらず、「生き方について」の価値である福祉の最大化のために、潜在能力を生かす行為のしかたや自身のあり方がいかに自由に提案されるかが問われる。

(2) 潜在能力アプローチと自由

こうした意味で、潜在能力アプローチは自由に基礎を置く。その様子を3点において整理しておこう²¹⁾。

第一は、「目標追求の機会」と「選択の過程」という、自由の2側面についてである。

潜在能力アプローチでは、「自分が価値があると評価する理由をもつものを達成する」自由、あるいは、「“こうすること・そうあることは価値がある”と評価するものごとについて、自分が実際にこのようにし・そのようにあろうとする」（括弧内は引用者）自由が尊重される²²⁾。より多くの自由は、より多くの目標（objectives）を追求する機会をもたらすのである²³⁾。

そこではまた、「何を欲し何を大切と考え究極的に何を選ぶように決めるのか」という、決める自由にも関心が払われる²⁴⁾。価値あるものごとが達成されるまでのみちすじを含めて、可能なさまざまな代替案が広く視野に入れられる。選択の過程が大切にされるのであり、それは「人は、他者に課された束縛によってある状態に入ることが強要されるのではないことを、いつも確かめておきたい」ものだからである²⁵⁾。

なお、セン氏は、「彼がなしうる最善（最大水準の目標）は全く変化していないが、ある重要な意味において彼の行動の余地（選択の幅）は以前よりも縮小している」（括弧内は引用者）場合もあるという²⁶⁾。

第二は、潜在能力アプローチにおける評価可能性をめぐるものである。

潜在能力として大切だと思われる諸機能は、総合してとらえられる。すなわち、諸機能は評価の尺度をそれぞれに異にしているため効用アプローチや資源アプローチのように通約する（同じ単位で大小を測る）ことは困難であるが、それぞれを比較し順序づけすることができる²⁷⁾。「情動に圧倒され」なければ、あたかも「散文を話すのと同じように」選択できるのである²⁸⁾。機能の重みづけや評価の結果は、事前的・一覽的・固定的に与えられるのではなく、「日々につけられる吟味と対話の影響を受け」ながら、ある幅をもって見出される²⁹⁾。潜在能力アプローチは、そのようにしてなされた「部分的な順序づけと限られた承認を信頼する」ところから始まる³⁰⁾。

こうして潜在能力アプローチでは、相対的な重要性に関する評価がなされるのであるが、「評価の範囲を拡げ信頼度を高めるとともに、評価活動をさらに活発にするための方法として公共的な理由づけ」が望まれる³¹⁾。

第三は、潜在能力をめぐる集団と個人の関係についてである。

潜在能力は、基本的には個人におけるものである。「集団の潜在能力」があるとすれば、「（その）大切さは、集団に属する諸個人が集団が達成してきたものに見出す価値を通して理解されるであろう」し、「かかわり合う諸個人の価値評価が依存しあっていることを認めつつも、私たちが活動に生かしてゆくのは要するに個人の価値評価なのである」（括弧内は引用者）³²⁾。そうした価値評価は「何かをめぐる他者と協働できることに個々人が価値を見出すことに付与する大切さ」にもとづきがちであり、「個人が社会に

参加する力量を評価するときには、その社会自体での生活の価値が暗黙裏に評価されている」³³⁾。

また、多様な集団に属してそれぞれの集団とのあいだで影響し合いながら自身の価値観を育みつつある個人を、「いずれかただ1つの集団の1メンバーとして」みてしまうことは許されない³⁴⁾。「自分自身をどのような存在として率直にみてゆこうとするかという、それぞれの個人がもつ自由」を大きく否定することになるからである³⁵⁾。

4. 潜在能力アプローチと生活目標反省過程

2.では生活する人びとが生活目標を反省的にとらえる様子についてみたが、そこでの着眼事項は次のようであった。

- 1° 生活目標が、行為または実現したい状態としてとらえられる。
- 2° 生活目標の細目は、幅広く深く考えられたうえで設けられる。
- 3° 集団や社会への参加を意味する生活目標も多い。
- 4° 質的に異なる多様な生活目標が総合的に把握される。
- 5° 生活目標が自身の生活行為として展開することが望まれる。
- 6° 生活目標を描くことと自律性保持を確かめることの両者が求められる。

また、3.でみた潜在能力アプローチの諸特徴には、次のことが含まれていた。

- 1' 潜在能力を現実化するために、生活行為や願わしい状態が示される。
- 2' 潜在能力を実現する多様な選択肢が用意される。
- 3' 多様な集団や社会で協働や交渉をするなかで、個々人に考え方が育まれる。
- 4' 多様な選択肢は重みがつけられ総合される。
- 5' 潜在能力を実現する過程で主体的であることが期待される。
- 6' 選択肢を用意することと選択し実現してゆくことという2局面で、自由が尊重される。

このように書き並べてみると、生活目標反省過程と潜在能力アプローチには多くの共通点がかがわれる。また、2.-(3)において快適さや便利さが実現されるなかで疎外が進むことについて述べたが、これは、「最善」の状態が実現されているながら「ある重要な意味において彼の行動の余地は以前よりも縮小」することがあるという3.-(2)での指摘と重なり合う。さらに言うと、「もっている財の機能を用いて実行可能な『ありさま』」を実現しようとする力を潜在能力と呼んだが、これは、生活目標を構想し実現に向かうこととほとんど同義ではないだろうか。

本稿では、A.セン氏のごく一部の論考を垣間見たにすぎない。あるいは、深く豊かな潜在能力アプローチ論を、筆者の関心に合わせて狭く読むことになったかもしれない。その意味で、上に指摘した潜在能力アプローチと生活目標反省過程との共通性は、表層的ないし部分的なものにとどまるかもしれない。今後、同氏の多数の文献を精細に検討することが必要であろう。

[注]

- 1) 乗本秀樹『システムと姿勢のライフ論—新生活設計学Ⅰ—』(1999年、同文館出版)を参照のこと。
- 2) 本節は、乗本秀樹「生活設計における目標設定の考え方」((財)生命保険文化センター『生活設計の今日的課題と今後のあり方』、2014年)の一部(pp.46-49, pp.62-63)を加筆したものである。
- 3) I. H. グロスとE. W. クランドルは、「マネジメントを導く力」として「価値—目標—基準」を掲げる(I. H. グロス・E. W. クランドル(松下英夫・今井光映・丸島令子・梅村敏郎訳)『現代ホームマネジメントの原理』、家

政教育社、1970 年、p. 33)。そして、「目標…は、人がそれに働きかける何か明確なものを意味する。」と言い、たとえば『円満な生活』という価値は…、それを実現する『家族ぐるみの休暇』という目標であれば明白である。」と言う (p. 33, 39)。このような「目標」の理解は、「目的－目標－基準」を提案する本稿と共通するが、「価値」と「基準」については理解がやや異なる。

グロスと克蘭ドルにおいて、「価値は…顕在的・潜在的な望ましいものについての観念であり、われわれの選択の方法、様式、あるいは行動の目標を支配する。価値の組み合わせは… (いろいろな定義があるが) たいいていのものには、健康、美、愛、知識、幸福が含まれ…ている」(p. 35。括弧内は引用者。)。また、彼らは、「価値」は生活者によって意識されるとはかぎらず観察者によって推測されるという。「価値」に関する以上の理解には賛同できるが、本稿に言う「目的」であるためには、そのような価値の実現を目指すという付言を要する。

また、「基準」について、彼らは次のように言う。「基準は人が目標に向かって働きかける際に応じる制限を設ける。他人の価値や目標は、言わなければただ推測することができるのみであるが、基準は観察されるためにある。」(p. 52)。「伝統的基準または柔軟的基準に分類できる」が、「伝統的基準に柔軟的基準を調和させる際には、个性的であることと対照して共同社会との同調に基礎を置くということ以外に、(「気軽さ」が「無頓着」であってはならないなどの) 質の問題が起ってくる。」(p. 54, 58。括弧内は引用者。)。グロスと克蘭ドルにおいては社会的な要因への関心が強いが、1 人ひとりの個性と多様さを許す「柔軟的基準」は本稿に言う「基準」と同じではないか。

4) いくつか補足しておこう。

第一は、生活目標群の全体的な形状についてである。生活目標の一つ一つは時の推移とともに継起するものであるから、脳裏にであれ紙面にであれ体系や全貌を空間的に描くことは困難である。しかし、必要に応じて部分局面を描くことは可能である。図 2 はその一例であるが、全体的な形状についてはあくまでも憶測である。

第二は、生活目的と生活目標の乖離についてである。すなわち、「(さまざまな) 生活目標に導かれて活動するのは『しあわせ』でありたいからだ」と説明することに、無理は感じられない。しかし、逆に、『『しあわせ』であるように生活目標を設ける』ことについて、必要性はわかるものの、具体的に行うのは難しい。何よりも、置かれている状況や「しあわせ」の内容があきらかでなければならないからである。このことを考慮して、図 2 では、生活目的と生活目標の間に隔たりを設けている。

- 5) 大河内暁男『経営構想力－企業者活動の史的研究－』、東京大学出版会、1979 年。
- 6) 同上、p. 66。
- 7) 同上、p. 60。
- 8) 同上、p. 63。
- 9) 一定程度に習慣化・ルーチン化することによって、生活行動（実行の過程）は円滑に展開する。
- 10) 本節の以下の記述は、H. Norimoto “Convenience and Identity in Our Daily Lives” (Proceedings of the 16 th Tri-University International Joint Seminar and Symposium 2009), Mie University, Japan, October 21, 2009. を要約し、加筆したものである。
- 11) 佐々木隆「生産組織における経営体的性格について」、『農林業問題研究』第 13 巻 4 号、1977 年。
- 12) 多くの消費生活協同組合で、組合員どうしの顔が見える班活動が行われている。ほぐす効果が期待されてのことである。硬化する組織をほぐすことは、「生活経営力」の内容の 1 つであろう（日本家政学会生活経営学部会編『暮らしをつくりかえる生活経営力』、朝倉書店、2010 年）。
- 13) Amartya K. Sen “Peasants and Dualism with or without Surplus Labor”, The Journal of Political Economy, volume LXXIV, No. 5, 1966.
- 14) アマルティア・セン（大石りら訳）『貧困の克服－アジア発展の鍵は何か－』、集英社、2002 年。
- 15) アマルティア・セン（鈴村興太郎訳）『福祉の経済学－財と潜在能力－』、岩波書店、1988 年。
- 16) 同上、pp. 1－9。
- 17) 以下の 4 段階は、関数形式による説明（前掲『福祉の経済学』、pp. 23－26）を書き直したものである。
- 18) 同上、p. 25。
- 19) 同上、p. 23。
- 20) 同上、p. 44。

- 21) Amartya Sen “The Idea of Justice”, Penguin Books, 2009, pp. 225–252. (本稿では拙訳によったが、あらためて邦訳書(池本幸生訳『正義のアイデア』、明石書房、2011年)を参照して、より正確を期したい。)
- 22) 同上、p. 231。
- 23) 同上、p. 228。
- 24) 同上、p. 232。
- 25) 同上、p. 228。
- 26) 前掲『福祉の経済学』、p. 27。
- 27) 前掲 “The Idea of Justice”、pp. 240–241。
- 28) 同上、p. 241。
- 29) 同上、p. 242。
- 30) 同上、p. 243。
- 31) 同上、pp. 242–243。
- 32) 同上、pp. 242–243。
- 33) 同上、p. 246。
- 34) 同上、p. 246。
- 35) 同上、pp. 246–247。

【追記】本稿は、中部地区二部会(日本家政学会家政学原論部会・同生活経営学部会)合同研究会(2014年4月12日、椋山女学園大学)での発表をとりまとめたものである。